

## 【展覧会評】

### 「マリアノ・フォルチュニ 織りなすデザイン展」

会期：2019年7月6日（土）～10月6日（日）

会場：三菱一号館美術館

国際ファッション専門職大学 平井秀樹

マリアノ・フォルチュニ (Mariano Fortuny, 1871-1949。以下、フォルチュニ) は近年再評価が進み、サンクトペテルブルクのエルミタージュ美術館<sup>1)</sup>、パリのガリエラ宮パリ市立モード美術館において大規模な回顧展が開催<sup>2)</sup>されるなど、世界的に注目を集めている。日本でも、2019年7月6日(土)～10月6日(日)の期間、三菱一号館美術館にて、フォルチュニに焦点をあてた初めての本格的な回顧展が開催された。

フォルチュニは、1871年にスペイン南部のグラナダで生まれ、ローマに移ったが、フォルチュニが3歳の時、父親は36歳で病没し、母親はフォルチュニと姉を連れて、兄弟のいるパリに移住し幼少期、少年期を過ごし、その後、ヴェネツィアで創作活動を行った。フォルチュニは、「デルフォス<sup>3)</sup>」と呼ばれる、細かなプリーツを施した絹のドレスのデザイナーとして20世紀前半の服飾の世界にその名を刻んだ。「デルフォス」は日本や中国などから輸入されたとされる最高級の絹を鮮やかな色に染め、プリーツを施した4～5枚接ぎの筒状ドレスである。プリーツの技法は1909年にフランス特許庁に特許申請がされているが、申請書は概念的説明であることから、それを元にしても「デルフォス」は再現不可能と言われている。一説では、絹に卵の黄身を塗って手織りでプリーツ加工を施していたのではないかと推測されるが、真相は定かではない。

「デルフォス」はそれまで必須であったコルセットから女性を解放するドレスとして

デザインされた。同時期にモードの世界を席卷したフランス人ポール・ポワレ (Paul Poiret, 1879-1944。以下、ポワレ) もコルセットを使わないハイ・ウエストのドレス「ローラ・モンテス<sup>4)</sup>」を発表した。他にも、ジャンヌ・ランバン (Jeanne Lanvin, 1867-1946) らパリのクチュリエとともに現代ファッションに至る潮流を作った人物<sup>5)</sup>とされている。

「デルフォス」は、造形的なプリーツと機能性の融合したデザインで新しい衣服を提案したという点で非常に革新的であり、ゆったりと女性の身体の美しさを際立たせるシルエットに魅せられ、貴族や舞台女優など時代を代表する女性たちがこぞって身につけたと言われている。ポワレとフォルチュニは、コルセットを用いないドレスを生み出したファッションデザイナーとして人気を二分したとされる。

しかし、この2人は、ファッションデザイナーとして、コルセットから女性を解放したという共通点はあるが、相違点もある。相違点は、当時のファッション雑誌を見ても、ポワレと比べてフォルチュニは露出が少ないことである。それゆえ、ポワレと同列にフォルチュニをファッションデザイナーとして扱って良いのかという疑問が残る。そのことは、今回の展示の、絵画、版画、写真、舞台装置、テキスタイル、衣装とさまざまな展示をすべて見たうえで、この人は本当にファッションの人なのかと不思議に感じた点でもある。

今回の展示は、「デルフォス」に始まり「デルフォス」に終わっていたが、ほぼすべての部屋に染織、「プリント」が散りばめられていた。それは、写真であったり、版画であったりさまざまであるが、とくにテキスタイルに如実に現れていたように感じる。すなわち、フォルチュニに通底する1つの美意識は、「デルフォス」というよりも「プリント」に表れていたのではないだろうかと強く感じたのである。それは、今回の展示が、「プリント」に表れた美意識を、非常に上手く構成し、それを表現していたことにもよる。

フォルチュニが用いた技法で特徴的なのは、刺繍の代わりに「プリント」という技法を用いた点である。「プリント」技法を用いることによって生地を軽さを維持し、プリーツの落ち感などに影響を与えることもなく、薄く透き通るよう生地に洗練された感覚をもたらしたといえる。フォルチュニは、生地制作過程において、型を作成し布地に模様を

プリントする技法を用いていたが、元の布が刺繍や織で表現された文様もすべてプリントに置き換えて表現していた。たとえば、元はベルベットなどの厚手の布地に施された豪華な文様でも、プリントにすることで、シルクやプリーツ地などさまざまな布地に転写することができたのである。刺繍や織りを用いないことで、重厚感のある重々しいドレスとは対照的な、美しく、軽やかなドレスに仕上がっており、それは、本来女性達が求めていたものであったといえる。

ゆえに、フォルチュニの一番優秀な仕事は、「プリント」だったのではないかというのが評者の解釈である。そして、今回の展示構成で、フォルチュニは「デルフォス」の人というより「プリント」の人であることを再発見することができたということからも、非常に意味のある展示だったといえる。

つぎに、フォルチュニがファッションデザイナーの枠組みで扱えないと考える根拠は以



図1「マリアノ・フォルチュニ 織りなすデザイン展」の会場風景  
(2019年8月25日筆者撮影)

下の2つの点からである。

第1は、「デルフォス」の基本デザインがほとんど同じだったということである。「デルフォス」は1907年に世に出てフォルチュニが亡くなる1949年まで約30年間にわたって作られていた。しかし、その間、デザインはほとんど変わっていない。ヘムラインや袖の若干の変化と紐に金属を巻いてみたり、装飾のガラスのトンボ玉を多数付けてみたりと細かい装飾の違いはあるが、基本のデザインはほとんど同じである。

ポワレをはじめとするファッションデザイナーは、異素材を組み合わせたり、デザインを変えてみたり、シルエットを変えてみたり、ウエストラインの位置を上げてみたり、下げてみたり、流行や時代にあわせてさまざまなデザインを展開するのがファッションデザイナーの仕事であるが、「デルフォス」にはそれがなかった。

第2は、「デルフォス」が基本的に室内着だったとされていることである。1980年代は、ファッションデザイナーの服を女優が外のパーティーなどに着て行って認知されていくというプロセスがあった。それが、雑誌のグラビアなどに掲載されてファッションデザイナーとして支持されるようになっていくのである。しかし、「デルフォス」は、室内着<sup>6)</sup>として着用されていたため、「デルフォス」を着て外に出かける時は、手袋などの装備が必要であったと言われている。

以上の2点から、フォルチュニはファッションデザイナーとして語られることが多いが、本当はファッションの人ではないのではという疑問が残る点である。

また、ビジネス的な側面では、フォルチュニはテキスタイルデザイナーとしてポワレに生地を提供していたと言われている。これは、あまり表には出ていなかったが、フォルチュニは生地屋としてもビジネスを展開<sup>7)</sup>しており、「デルフォス」と生地の販売でお金を稼ぎ、その資金で、自身の画家などのアーティスト

としての活動を展開していたのではないかと推測する。これらのことは、フォルチュニ自身も、自らをファッションデザイナーではなく画家と名乗っていたことにもつながってくるのではないだろうか。

最後に、フォルチュニは、とても現代的で、多彩な才能を上手くビジネスに結びつけていた人という印象を持った。そして、今回の展示でフォルチュニの創作活動の全体像を知ることができたことで、フォルチュニはファッションだけの人ではないという新たな認識を持つことができた。フォルチュニは、伝説のドレス「デルフォス」で100年先の現代まで見通したものを生み出した。そして、ファッションの人というより、発明家であり、絵画、版画、写真、建築、舞台装置、衣装、テキスタイルデザインなど多彩な才能を併せ持った総合芸術家だったといえそうである。さらに、多岐にわたる業績からみても、非常に現代的な発想の企業家の側面を併せ持った芸術家だったといえる。

謝辞 取材及び資料提供にご協力頂いた三菱一号館美術館主任学芸員、阿佐美淑子氏に深く感謝する。

#### <注>

- 1) エルミタージュ美術館は、サンクトペテルブルクにあるロシアの国立美術館。1990年に世界遺産に包括登録された。2016年に同館が所蔵する染織品を中心とした工芸品と、フォルチュニ美術館の所蔵する資料を比較考察する展覧会が開催された。
- 2) 2017年に同館が所蔵する「デルフォス」その他の服飾品や染織品などを使って同時代の服飾史を概観する大規模な展覧会が開催された。
- 3) デルフォスは、古代ギリシャ彫刻「デルフォイの御者」という等身大の青銅像の衣装に着想を得た妻のアンリエットが、こんな衣装が欲しいと言ったのを受けて作成したとい

われるドレスで、全体に施された波打つプリーツが特徴とされる。

4) ポール・ポワレが1906年に発表したハイウエストドレスで、女性をコルセットから解放した、ファッション史上で最も革新的な発表であったと言われている。

5) 阿佐美淑子 2018「マリアノ・フォルチュニ異国趣味——日本の意匠を基点として」鹿島美術財団年報 / 鹿島美術財団 [編] (36)(別冊)、p. 474 参照。

6) 朝倉三枝 2019「20世紀初頭のファッションにおけるマリアノ・フォルチュニの革新性」展覧会図録、p. 225 参照。「マルセル・プルースト [1871-1992]」の長編小説『失われた時を求めて』の中で、デルフォスは部屋着として描かれていた。なぜなら、19世

紀末頃からフランスでもコルセットを着けずに着物やティーガウンなどを部屋着として着る流行が現れてはいたものの全身を包む繊細なプリーツがボディーラインを拾い、その身体性を際立たせたデルフォスは、あまりに官能的だったからである。」

7) 2016年春夏オートクチュールコレクションで、「ヴァレンティノ (Valentino)」の Maria Grazia Chiuri (マリア・グラツィア・キウリ) と Pierpaolo Piccioli (ピエールパオロ・ピッチョーリ) がフォルチュニの生地を使用して、「デルフォス」の現代版のドレスを打ち出して話題になった。フォルチュニ社は今も当時の製法で綿素材のテキスタイルの製造販売を継続しており、購入することも可能である。

## ヨーロッパにおけるエコロジーとファッション

### アムステルダムミュージアム、Fashion for Good が示すこと

国際ファッション専門職大学 河西瑛里子

#### 1 はじめに

ヨーロッパでは「エコ」が流行っている。もともと環境規制の基準が厳しく、自然エネルギーへの関心も高かったが、ここ1年ほどはプラスチック製品の使用に厳しい目が向けられるようになった。私が調査をしてきたイギリスのグラストンベリーでも、エコバッグの推奨はもちろん、癒しの水が湧き出ていることで知られる泉の管理団体が、水を持ち帰るために販売しているボトルを、2019年の8月にはプラスチックからガラスに切り替えていた。同じころに開かれた女神運動 ([河西 2015] 参照) の新月の儀式のなかで、10人ほどの参加者が何か今後の決意表明する際に、「もうプラスチックは使いません!」と宣言した。ロンドンなどの都市部では、2018年に結成された温暖化や気候変動を訴

える市民運動のエクスティンクション・レベリオン (Extinction Rebellion、通称 XR、日本語での詳細は [鈴木 2019] 参照) がしばしば橋や道路を封鎖するようになり、市民生活に支障を及ぼすことで、その存在感を示していた。

全産業のうち、石油産業に次いで環境を汚染しているとされるファッション産業においても ([大倉 2019] 参照)、環境に配慮する動きが広がっているのは周知の通りだ。太陽や風など自然エネルギーを利用し、環境に負荷をかけないように染色した綿100%のTシャツを販売する20代の女性に出会ったのは、2018年7月のグラストンベリーの市場だった。同年8月に町のホールで開かれたヴィーガン<sup>1)</sup>・フェスタ (Vegan Festa) においても、食品だけでなく、廃材になったタイヤを再利用したベルト、犬のリード、サン